〈調査報告〉

関西女子短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価

――関西女子短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査報告書（2）――

鍵　岡　正　俊*，大　岡　知　子*，髙　木　信　良**，
堀　　初　子**，森　川　英　子**

The occupations and the careers of the graduates of Kansai Women's College and their evaluation of the junior college education

――the second report of investigation on the education program, the work and their way of life of the graduates――

Masatoshi Kagioka, Noriko Ooka, Nobuyoshi Takagi,
Hatsuko Hori and Hideko Morikawa

Ⅰ　はじめに

平成 19 年 3 月～4 月において、本学の教育の成果を点検・評価し、今後の発展の方向性を明確にすることを目的として、卒業後 1、3 および 7 年目の全学科卒業生を対象に「関西女子短期大学卒業生の学習・仕事・生活に関する調査」を実施した。第 1 回報告では、短大教育の有用性評価に関して、各質問項目の単純集計結果をもとに、本学卒業生が職業生活のための効用を高く評価している点を指摘した。本稿では、「『短大卒業生の進路・キャリア形成と短大評価』調査研究報告書」（2005 年 2 月　短期大学基準協会）を念頭に置きながら、各調査項目について本学における学科、コース別の分析を行い、その特徴的な傾向について報告する。

Ⅱ　調査の概要

1. 調査実施時期

平成 19 年 3 月～4 月

2. 調査の項目

本学教育の点検・評価、向上・充実に関する以下①～⑦の調査項目を設定し、全 14 ページの調査票を作成した。

①本学入学と学生生活、本学の教育内容に対する評価
②職業への移行の実態
③進学と学業継続傾向
④生涯教育への参加とそのニーズ
⑤私的生活領域における行動や意識価値観
⑥短大の効用についての評価
⑦関西女子短期大学に対する総合評価

*関西女子短期大学　准教授
**関西女子短期大学　教授

3. 調査の対象と方法

卒業後 1 年目（平成 18 年 3 月卒）、3 年目（平成 16 年 3 月卒）、7 年目（平成 12 年 3 月卒）の本学全学科卒業生を対象として、調査票を郵送し、4 月末日締め切りで回収した。

4. 回収率

送付数は 1,257、回収数は 260、回収率は 20.7% であった。

詳細は、関西女子短期大学紀要 17 号参照。

Ⅲ　結　果

1. 対象者自身の特性

(1) 仕事と結婚・出産に対する考え方

「結婚や出産時に仕事をやめるが、子どもが一定年齢になったら再び仕事に就く」とするものが保育、歯科、医療では 70% 程度を占めるが、養護では 30% 台にとどまり、代わって「結婚や出産に関わらず仕事を続ける」とするものがほぼ半数を占めた（表 1)。

2. 本学入学してから在学中の事柄

(1) 進路選択の検討

進路として本学を選択した際、短期大学以外への進学を検討したかどうかについて、「考えた」とするものは、保育 37.7%、医療 44.4% に対して、歯科 68.9%、養護 56.5% であった。短大以外との競合度は、特に歯科において高く、これに対して保育では比較的短大志向が強い傾向にある。

(2) 進学検討した学校の種類

歯科では、専門学校 80.5%、四年制大学 39.0%。養護では、専門学校 33.3%、四年制大学 79.5% という結果を得た。進学を検討した時点での主たる競合校は、歯科では専門学校であり、養護では四年制大学であったといえる。

(3) 短期大学選んだ決め手となった理由

「専門学校より教養を身につけることができるから」をあげたものが歯科において 43.6% と特徴的に高い割合を示した。一方「経済的な理由から」としたものは、保育で 19.2% を示すものの他のコースにおいては 10% 前後にとどまった（表 2)。

(4) 在学中に一番力を注いだ活動

どの学科コースについてもよく似た傾向を示しており、本学全体の数字でみると、「授業関係の勉強」をあげたものが 50.0%、「友達との交際」が 27.9%、「サークル・クラブ」が 2.7%

表 1　仕事と結婚・出産に対する考え方

	全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
結婚しないで仕事を続ける	5	1.9	1	1.5	1	1.6	3	4.3	0	0.0	0	0.0
結婚や出産にかかわらず仕事を続ける	75	29.0	16	23.5	11	18.0	34	49.3	12	22.2	2	28.6
結婚や出産時に仕事をやめる	23	8.9	4	5.9	6	9.8	7	10.1	5	9.3	1	14.3
結婚や出産時に仕事をやめるが、子供が一定年齢になったら再び仕事に就く	155	59.8	46	67.6	43	70.5	25	36.2	37	68.5	4	57.1
仕事に就かないで結婚する	1	0.4	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
仕事に就かないで結婚し、子供が一定年齢になったら仕事に就く	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合　　計	259	100.0	68	100.0	61	100.0	69	100.0	54	100.0	7	100.0

表 2　短期大学を選んだ決め手となった理由

	全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
就職に有利だと思ったから	26	20.0	5	19.2	11	28.2	5	12.8	5	21.7	0	0.0
四年制大学より早く社会に出られるから	15	11.5	2	7.7	3	7.7	7	17.9	2	8.7	1	33.3
専門学校より教養を身につけることができるから	30	23.1	3	11.5	17	43.6	5	12.8	5	21.7	0	0.0
大学への編入学の制度もあったから	7	5.4	3	11.5	0	0.0	3	7.7	1	4.3	0	0.0
他の学校は自宅（親元）から通えないから	4	3.1	0	0.0	1	2.6	1	2.6	2	8.7	0	0.0
経済的な理由から	14	10.8	5	19.2	2	5.1	5	12.8	2	8.7	0	0.0
希望した大学に進学できなかったから	14	10.8	3	11.5	0	0.0	6	15.4	4	17.4	1	33.3
その他	20	15.4	5	19.2	5	12.8	7	17.9	2	8.7	1	33.3
合　　計	130	100.0	26	100.0	39	100.0	39	100.0	23	100.0	3	100.0

表 3　授業期間中のその他の 1 日平均学習時間

	全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
ほとんどしない	92	36.2	28	42.4	22	36.7	24	35.3	16	30.2	2	28.6
30 分未満	23	9.1	6	9.1	8	13.3	4	5.9	5	9.4	0	0.0
30 分～1 時間未満	46	18.1	11	16.7	11	18.3	12	17.6	11	20.8	1	14.3
1 時間～2 時間未満	77	30.3	17	25.8	16	26.7	22	32.4	19	35.8	3	42.9
2 時間～3 時間未満	13	5.1	3	4.5	3	5.0	5	7.4	1	1.9	1	14.3
3 時間以上	3	1.2	1	1.5	0	0.0	1	1.5	1	1.9	0	0.0
合　　計	254	100.0	66	100.0	60	100.0	68	100.0	53	100.0	7	100.0

となっている。短大基準協会が実施した前掲調査結果（「授業関係の勉強」38.4%、「友達との交際」25.8%、「サークル・クラブ」8.0%）と比較して、本学卒業生は授業に熱心に取り組んでいたといえる。またサークル・クラブ活動については、短大全体が不活発な傾向の中で本学もその例外ではないことを示している。

(5) 授業期間中の 1 日平均授業時間（1 時間＝60 分）

本学全体では、「6 時間台」40.7%、「5 時間台」21.2%、「4 時間台」25.0% に対して、歯科では、「6 時間台」52.6%、「5 時間台」15.8%、「4 時間台」21.1%、と他学科コースと比べて授業時間が長い。一方、医療では、「6 時間台」21.7%、「5 時間台」28.3%、「4 時間台」39.1% と比較的授業時間が短い。資格必修科目との関係で、科目選択の自由度が歯科では低く、医療では高いと考えられる。

(6) 授業期間中のその他の 1 日平均学習時間（家や図書館での学習を含む）

本学全体では、「1～2 時間」が 30.3% であるが、「ほとんどしない」の 36.2% を含め「1 時

間未満」が 63.4% を占めている。授業以外での平均学習時間が圧倒的に不足しているこの傾向は、各学科コース共通している（表 3）。

(7) アルバイトの回数、時間（授業期間中）

本学全体では、週に「2～4 回」が 63.7%、1 回当たりの平均時間は「3～5 時間」が 63.7% という結果であった。この傾向について学科コースによる大きな差異はみられない。

(8) 本学での学習内容や方法について重視されていたと思う項目

「専攻分野の理論や概念の学習（講義での学習）」や「現実の課題に即した学習（実習・演習等での学習）」の項目については、どの学科コースにおいても「重視をされていた」としている。一方、「授業外で教員とコミュニケーションをもつこと」の項目については、「重視されていた」と感じていたものが、本学全体では 47.4% と半数に満たず、比較的高い養護でも 65.2%、医療では 24.5% と低い数字が示された。また「専攻科目以外の科目の学習」の項目については、「重視されていなかった」と思うものが本学全体で 65.0%、特に歯科では 75.0% の高い数値を示した（表 4）。

(9) 勉学の条件の充実度

「勉学全般に対する指導体制」の項目では、本学全体で 93.4% が「充実している」として高い評価を示している。この傾向はどの学科コースにも共通している。

一方「選択できる授業の内容（多様性）」の項目では、本学全体では、62.3% が「充実して

表 4　本学での学習内容や計画について重視されていたと思う項目

		全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
非常に重視されていた	授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	22	8.7	9	13.8	2	3.4	9	13.0	1	1.9	1	14.3
	専攻学科以外の科目の学習	7	2.8	3	4.6	0	0.0	3	4.3	0	0.0	1	14.3
まあ重視されていた	授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	98	38.7	26	40.0	23	39.0	36	52.5	12	22.6	1	14.3
	専攻学科以外の科目の学習	82	32.3	24	36.9	15	25.0	26	37.7	16	30.2	1	14.3
あまり重視されていなかった	授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	110	43.5	26	40.0	26	44.1	19	27.5	34	64.2	5	71.4
	専攻学科以外の科目の学習	130	51.2	30	46.2	33	55.0	32	46.4	31	58.5	4	57.1
全く重視されていなかった	授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	23	9.1	4	6.2	8	13.6	5	7.2	6	11.3	0	0.0
	専攻学科以外の科目の学習	35	13.8	8	12.3	12	20.0	8	11.6	6	11.3	1	14.3
合　計	授業外で教員とコミュニケーションをもつこと	253	100.0	65	100.0	59	100.0	69	100.0	53	100.0	7	100.0
	専攻学科以外の科目の学習	254	100.0	65	100.0	60	100.0	69	100.0	53	100.0	7	100.0

表 5　採用側にとって短大卒であることの重要性（印象）

	全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
非常に重要だった	36	16.7	15	25.9	7	12.3	4	7.5	9	22.0	1	16.7
まあ重要だった	63	29.3	22	37.9	6	10.5	16	30.2	18	43.9	1	16.7
あまり重要でなかった	82	38.1	16	27.6	30	52.6	22	41.5	11	26.8	3	50.0
全く重要でなかった	34	15.8	5	8.6	14	24.6	11	20.8	3	7.3	1	16.7
合　　計	215	100.0	58	100.0	57	100.0	53	100.0	41	100.0	6	100.0

いる」と回答しているが、歯科では「充実していない」とするものが 60.6% を占める。

同様に、「授業を選択する自由」の項目についても、保育 75.7%、医療 79.2% が「充実していた」とするのに対して、歯科では 60.7% が「充実していない」と回答している。

3. 卒業後の進路

(1) 卒業時の進路

本学全体では、「卒業後すぐに就職」84.8%、「卒業後すぐに進学」2.7%、「進学も就職もしなかった（アルバイト・フリーター、家事手伝い、求職活動を続けた）」12.4% という結果であった。各学科コースの比較では、「進学も就職もしなかった」項目について、歯科では 1.6% とほとんどなく、養護では 18.7% と比較的高い割合を示した。

また、進学も就職もしなかった理由については、本学全体で「やりたいことがあったから」は、わずか 6.9% にとどまり、「進学も就職も決らなかったから」、「したいことが決っていなかったから」という消極的理由が 62.0% を占めた。

(2) 採用側にとって短大卒であることの重要性（印象）

歯科、養護では短大卒によるアドバンテージは低く、一方、保育、医療においては比較的重要視されていると感じている、という結果を得た（表 5）。

4. 現在の仕事や活動

(1) 現在の職業（現在仕事をしていない場合は、最後に勤めていた仕事について）

保育では、保育士・幼稚園教諭が 82.4%、歯科では、歯科衛生士が 96.7%。また、養護では、養護教諭 60.3%、学校教職員 4.4%、医療では、医療秘書・医療事務 58.5%、診療助手 9.4% という結果であった。歯科をはじめとしてどの学科コースにおいても、専門分野順接職種についている割合が高いといえる。

5. 短大教育と仕事との関係

(1) 職場で必要とされる知識・能力・技能

「話し言葉によるコミュニケーション」、「人との交渉能力、折衝能力」が非常に必要とされていると感じている一方、これらの能力を短大卒業までに十分身につけたと感じていない（表 6 A）（表 6 B）。

(2) 現在の仕事にもっともふさわしい学歴

保育では、「短大卒」が 75.9%、「大学学部卒」14.8%。歯科では、「短大卒」が 54.7%、「専門学校卒」が 35.8%、「大学学部卒」が 7.5%。養護では、「大学学部卒」が 53.7%「短大卒」が 29.6%。医療では、「短大卒が」42.5%、「専門学校卒」が 35.0% という結果を得た。

表 6（A）「話し言葉によるコミュニケーション・人との交渉能力、折衝能力」を短大卒業までにどの程度身につけたか

		全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
十分身につけていた	話し言葉によるコミュニケーション	29	13.7	11	19.6	5	9.1	12	21.4	0	0.0	1	25.0
	人との交渉能力、折衝能力	20	9.4	6	10.7	3	5.6	10	17.9	0	0.0	1	25.0
まあ身につけていた	話し言葉によるコミュニケーション	116	54.7	32	57.1	25	45.5	29	51.8	27	65.9	3	75.0
	人との交渉能力、折衝能力	87	41.0	29	51.8	18	33.3	20	35.7	19	45.2	1	25.0
あまり身につけていなかった	話し言葉によるコミュニケーション	62	29.2	13	23.2	21	38.2	15	26.8	13	31.7	0	0.0
	人との交渉能力、折衝能力	90	42.5	19	33.9	26	48.1	24	42.9	19	45.2	2	50.0
全然身につけていなかった	話し言葉によるコミュニケーション	5	2.4	0	0.0	4	7.3	0	0.0	1	2.4	0	0.0
	人との交渉能力、折衝能力	15	7.1	2	3.6	7	13.0	2	3.6	4	9.5	0	0.0
合　計	話し言葉によるコミュニケーション	212	100.0	56	100.0	55	100.0	56	100.0	41	100.0	4	100.0
	人との交渉能力、折衝能力	212	100.0	56	100.0	51	100.0	56	100.0	42	100.0	4	100.0

6. 仕事への態度や職業上の満足

（1）全体としての満足度

「全体として、どの程度現在の仕事に満足しているか」という質問に対して、「満足している」と答えたものは、保育 74.6%、歯科 64.9%、養護 73.3%、医療 58.5% であった。

項目別では次の 2 項目について、満足度に若干のばらつきが出た。

①「高い収入」について

「不満足」としたものが、保育 67.4%、歯科 64.2%、医療 61.0% に対して、養護は「満足」が 70.4%。

②「将来のキャリア見通し」について

「満足」としたものが、養護 73.1%、医療 70.7%、歯科 60.3% に比べて、保育が 49.0% とやや低い。

7. 短大での学習経験を振り返って

（1）総括

「もし、あなたが今 18 歳で、もう一度高校卒業後の進路選択ができるとしたらあなたはどうしますか。」という質問に対して、進路別に「とても可能性が高い」と答えた割合は次のとおりである。

「短大に行く」は、保育 53.8%、歯 35.8%、養護 40.7%、医療 20.0%。「四年制大学に行く」は、保育 21.7%、歯科 25.9%、養護 37.3%、医療 35.3%。「専門学校に行く」は、保育

表 6（B）「話し言葉によるコミュニケーション・人との交渉能力、折衝能力」は今の職場でどの程度必要か

		全体		保育科		保健科 歯科衛生士コース		保健科 養護・保健コース		保健科 医療秘書コース		保健科 食品・栄養科学コース、福祉栄養学科	
カテゴリー		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
非常に必要とされている	話し言葉によるコミュニケーション	136	64.5	36	65.5	38	69.1	40	72.7	21	50.0	1	25.0
	人との交渉能力、折衝能力	102	48.6	26	47.3	28	50.9	35	63.6	12	29.3	1	25.0
必要とされている	話し言葉によるコミュニケーション	67	31.8	18	32.7	16	29.1	12	21.8	19	45.2	2	50.0
	人との交渉能力、折衝能力	84	40.0	24	43.6	23	41.8	17	30.9	18	43.9	2	50.0
あまり必要とされていない	話し言葉によるコミュニケーション	7	3.3	1	1.8	0	0.0	3	5.5	2	4.8	1	25.0
	人との交渉能力、折衝能力	21	10.0	4	7.3	3	5.5	3	5.5	10	24.4	1	25.0
全く必要とされていない	話し言葉によるコミュニケーション	1	0.5	0	0.0	1	1.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	人との交渉能力、折衝能力	3	1.4	1	1.8	1	1.8	0	0.0	1	2.4	0	0.0
合　計	話し言葉によるコミュニケーション	211	100.0	55	100.0	55	100.0	55	100.0	42	100.0	4	100.0
	人との交渉能力、折衝能力	210	100.0	55	100.0	55	100.0	55	100.0	41	100.0	4	100.0

11.9％、歯科 10.0％、養護 1.8％、医療 16.7％。この結果を見るかぎり、どの学科コースにおいても専門学校を選択する割合は低く、また、保育はいまだ短大志向が強いが、他のコースでは短大と四年制大学との競合状態に入っており、医療では既に四年制大学が短大を上回っている。

Ⅳ　考　察

1. 志願者確保への道

卒業生が本学への進学を検討している時点における本学の主たる競合校は、歯科では専門学校であり、養護では四年制大学であった。しかし、本学卒業後の感想では、保育はいまだ短大志向が残るものの、他のコースでは医療を含め、四年制大学との競合状態に入っており、医療では既に四年制大学が短大を上回っている。

また、「現在の仕事にもっともふさわしい学歴」について、社会人経験を経たものとしての卒業生の結論は、保育「短大」、歯科「短大」、養護「四年制大学」、医療「短大」である。

上記結果を踏まえた上で、保育、歯科、医療については他の競合短期大学との差別化を図り、養護においては四年制大学に対抗する方策を講じる必要がある。本学卒業後の専門性を考えるとき、単に量的確保ではなく、質的水準の確保も重要となる。手がかりを①社会人入学生の拡大、②学内教育の充実、③卒後教育の充実に求めたいが、本稿では調査との関係から②、③に関して以下適宜ふれる。

2. 学内教育の充実

(1) 教養科目の充実

歯科では、進路決定時に短大を選ぶ決め手となった理由として「専門学校より教養を身につけることができるから」が高い割合を示したにもかかわらず、入学後「専攻科目以外の科目の学習」については、「重視されていなかった」と思うものが 75.0% にのぼり、教養科目の充実について課題が残る結果となった。この点に関しては、本学全体の問題でもあり、また短期大学全体が抱える問題でもある。資格取得のため、専門科目必修化の圧力の中で教養科目の時間枠を確保する工夫が求められる。公開講座等、正課外での研修事業への参加を積極的に促すことも一つの方法であろう。

(2) 教育方法の改善

卒業生は、職場で必要とされる知識・能力・技能について「話し言葉によるコミュニケーション」、「人との交渉能力、折衝能力」が非常に必要とされていると感じている一方、これらの能力を短大卒業までに十分身につけたとは感じていない。何らかのカリキュラム上の工夫が必要である。例えば、総合演習、研究演習等の少人数教育活用や教育方法の改善、具体的には一方向教授型から双方向型の授業への転換（グループワークの取り入れ、学生参加型の授業、フィードバックの重視、教室外の学習との組み合わせなど）が考えられる。但し、教員自身、その多くが、双方向型授業を受けた経験に乏しいと考えられ、この点の研修事業の実施が喫緊の課題となろう。

(3) 学外オリエンテーションの充実、拡大

「授業外で教員とコミュニケーションをもつこと」については、「重視されていた」と感じていたものが、本学全体では半数に満たず、不満の残る結果となった。対策として、まずはオフィスアワーの有効利用が挙げられよう。さらに、本学が入学当初に実施している新入生対象の学外オリエンテーションに 2 年生を参加させることもこの問題の解決に有効であると考えられる。これは発展的に教学の学生スタッフ制度につながる可能性をもち、実現すれば学年を超えた交流と本学文化の学生レベルでの継承が期待できるものとなる。

(4) 学習態度

アルバイトは週に 2～4 回、1 回当たり平均 3～5 時間行っているのに対して、授業以外の家や図書館での学習は「ほとんどしない」の 36.2 %を含め「1 時間未満」の学生が 63.4% を占めているという結果であった。家庭学習時間の喪失は「教室内外での学修 45 時間をもって 1 単位」とする国の単位制度の前提を揺るがす問題である。早急に、授業後の学生をアルバイトから家庭学習へ引き戻すことが求められるが、現実には大変困難な課題である。当面の対策として、経済的支援としての奨学金制度の充実、進路指導と直結した学習指導、科目間の連携を前提とした体系的な課題の提供、保護者懇談会など家庭との連携等が考えられる。

(5) 進路指導

卒業時に「進学も就職もしなかった（アルバイト・フリーター、家事手伝い、求職活動を続けた）」ものが本学全体で 1 割強存在し、その理由については、「進学も就職も決らなかったから」、「したいことが決っていなかったから」など消極的なものが目立つ。卒業後の将来的イメージのない学生は今後増加することが考えられ、これに対する指導プログラムの研究が急がれる。

また、卒業生の現在の職業では、どの学科コースにおいても、専門分野順接職種に就いている割合が高いが、事務、販売等の一般職種に就いているものも一定割合存在する。本学では従来から、専門分野への就職に関しては学科コース主導、一般企業等への就職に関しては支援センター主導というゾーン・ディフェンス構造が存在していたが、今後は学科コースと支援センターの連携を密にし、学生の個性にあったいわばマンツーマン・ディフェンス構造の進路指導が必要となろう。

3. 総括

繰り返しになるが、今後の短期大学と競合する相手は四年制大学となる。本学は、2～3 年の短期間で資格取得ができ、専門職への就職率が高いという長所を持つと同時に教養教育への課題に代表される短期教育の欠点を併せ持つ。四年制大学卒業生をはじめとする社会人の進路変更組の受け皿としての役割を拡大し、専門職のスキルアップ研修をはじめとする卒後教育の充実によって短期教育の課題を克服することが対策の一つの方向性を示すと考える。卒後離職者への支援活動の充実も卒業生の満足度向上の方策となろう。

V　おわりに

「もし、あなたが今 18 歳で、もう一度高校卒業後の進路選択ができるとしたらあなたはどうしますか」という質問に対して、あるコースの卒業生の 59.3% が「同じ短大に行く（関西女子短大に行く）」可能性がとても高いと回答した。こうした卒業生の強い期待を大切に掬い上げながら、日々教育・研究に取り組まなければならないと改めて決意を固くした。

謝辞

調査にご協力頂いた卒業生の皆様、調査票の発送にご尽力いただいた同窓会の皆様に心から感謝申し上げます。なお、本報告は、平成 19 年度関西女子短期大学奨励研究として後援会からの研究費の助成を受けたものであります。ここに深く感謝申し上げます。

参考文献

1）短期大学基準協会「短大卒業生の進路・キャリア形成と短大評価」調査研究報告書　2005
2）中央教育審議会　学士課程教育の構築に向けて（案）2008
3）鍵岡正俊、大岡知子、高木信良、堀初子、森川英子　関西女子短期大学卒業生の進路・キャリア形成と短大評価－卒業生の学習・仕事・生活に関する調査報告書（1）関西女子短期大学紀要 17 号、89–108、2008